

中等度難聴児への聞き返しの指導に関する事例的研究

野住 明美

I 問題の所在

近年、新生児聴覚スクリーニング検査（以下新スクと表す）の導入により、軽度や中等度の難聴も早期発見が可能となった。しかしながら未だ全出生児が検査を受けてはならず、進行性の難聴や疾病などで検査後に難聴になることもあるが、軽度・中等度難聴児は音に対し反応があるため発見と対応が遅れがちである。軽度・中等度難聴児の言語発達について評価した研究は散見される。杉内・佐藤・浅野・杉尾・寺島・洲崎(2001)や、井上・大沼・原・鈴木・佐野・岡本(2005)は、軽度・中等度難聴児を対象にウェクスラー系知能検査を実施した。その結果、両者とも動作性IQに比べて言語性IQが優位に低い例が半数以上であったと報告している。中等度難聴児を対象とした事例研究は少なく、平島(2009)による、小学校4年生の中等度難聴児を対象とした聞き返しの事例研究はあるが、幼児や低学年という年齢を対象とした研究は見られない。

日本人の苗字は「かとう・さとう・はとう」などのように一部だけが違う苗字も存在する。しかしながら、その一部の音の聞き取りに異聴傾向がある場合には、聞き取りに困難な場面が想定され、聞き返し方を身につけておくことは重要であると考えられる。

II 目的

本研究では、異聴傾向のある中等度難聴の児童1名に対し、聞き取り困難場面を解決するための聞き返し方を指導し、その方略の定着を図ること、そして対象児の聞き返しの変化について分析することを目的とする。

III 対象児の実態

1 対象者

対象児は、普通小学校通常学級に在籍する小1の女兒1名で難聴発見が5歳6ヶ月、補聴器装用

開始は5歳7ヶ月であった。新スクは受けておらず、発音の歪みにより耳鼻科を受診し難聴が発見された。6歳0ヶ月時より教育相談を開始した。

2 聴覚的評価

聴力レベルは右耳67dB、左耳63dBで聴力型は谷型である。また、補聴器装用下での語音聴力検査(67-S語表)の静音下の結果は、提示音圧が45dBより小さくなると受聴明瞭度が下がり、提示音圧が40dBでは受聴明瞭度が45%となった。また異聴傾向があることが示された。騒音下での検査結果では、提示音圧55dB、SN比-5dBで70%であった受聴明瞭度が、提示音圧50dB、SN比-10dBでは30%に下がった。対象児が在籍していた保育所と進学先の小学校の音環境調査と情報収集を行ったが、どちらも騒音レベルの方が教師や保育士の声よりもはるかに大きいことがあり、対象児にとって話が聞き取れない場面の存在が示唆された。

3 言語的評価

絵画語彙発達検査とITPA言語学習能力診断検査を行った結果、語彙年齢、言語学習年齢とも実年齢より1歳以上の遅れが見られた。

4 聴覚・言語指導の結果と課題

対象児の異聴音を用いた聞き取り弁別学習を週1回1時間の指導の10分程度で実施した。また、語彙の不足と聴覚学習経験の不足を改善するために、なぞなぞやクイズ、絵本の読み聞かせを行ったが、よく知っているものでも、名前が分からないなど知っていることばに偏りが見られた。指導8ヶ月後には受聴明瞭度の改善が見られたが、異聴傾向については明らかな改善は見られず、聞き返しの指導の必要性が示された。

IV 方法

1 聞き返しの指導場面

指導は、X年9月からA大学研究室にて、週1回1時間の指導で全7回実施した。

2 指導内容

本研究では、対象児の異聴傾向がある音を含む苗字の聞き取りに関しての聞き返しの学習を設定した。指導には、聞き取り困難場面を想定したストーリーを作成し、文章と絵で表わしたワークシートと、登場人物のペープサートを用意した。指導場面での基本的な流れは、ワークシートのストーリーを読み上げた後、まず聞き取れなかった場合の対応を対象児に考えさせた。また、ペープサートを用いて指導者と対象児が聞き返し役と相手役に分かれ、ワークシートの一連のストーリーに沿って役割を演じた。本文中では、この役割を演じる一連の流れを「シミュレーション」と表現して用いる。シミュレーション場面でスムーズに適切な聞き返しができることで、聞き返しが定着したと評価した。指導内容を以下の6つのステップに分けて指導を行った。

1) STEP1：指導前の実態把握

指導に使う苗字の選定のため、指導者が対象児の斜め後ろから異聴音が入った苗字を読み上げ、対象児が苗字をポインティングするという形で対象児の聞き取りを正解数で評価した。また、聞き返しの実態を把握するために、ぬり絵のワークシートを用意し、指導者と対象児が異聴音の入った苗字を使って、色を塗る場所の指示を出すゲーム（以下、ぬり絵ゲームとする）を行い、対象児の聞き返しを評価した。

2) STEP2：話の内容が聞き取れない場合の聞き返し

「もう一度言ってください」の繰り返し要求と「だれ?」「なに?」「どこ?」などの聞き返し方について学習した。

3) STEP3：苗字が部分的に聞き取れない場合の聞き返し

「かとうさん?」のように苗字全部を繰り返す聞き返し方と、「か?」などのように聞き取りが

不明瞭な音のみを繰り返す聞き返し方について学習した。

4) STEP4：同姓3名から人物を特定するための聞き返し（属性や特徴を利用した聞き返し）

同姓3名の中から人物を特定するにはメガネの色の違いなど人物の特徴を使って聞き返したり、学年や組などの属性の情報や名前情報を使ったり、苗字に付け加えて聞き返したりすることが有効であることを学習した。

5) STEP5：苗字が部分的に聞き取れない場合の聞き返し（属性や特徴を用いた聞き返し）

苗字が部分的に聞き取れない場合にもSTEP4の方略を使用して聞き返しができることを学習した。

6) STEP6：指導効果の測定

STEP1と同様にぬり絵ゲームを行い、対象児の自発の聞き返しを評価した。

3 記録と分析の方法

指導の様子はデジタルビデオカメラ1台で撮影し、その映像データから指導者と対象児の発話、行動・表情・視線、支援内容などを文章化した。指導場面のVTRと文章化したプロトコルデータを分析対象とした。聞き返しの機能分類と表現形式、表現形式の下位分類は福富(2012)のものを用いた。

V 結果

指導前(STEP1)でのぬり絵ゲームで見られた対象児の聞き返しを表1に、指導後(STEP6)で見られた聞き返しを表2に示す。

複合エコー型とは、福富(2012)の分類では「繰り返し+ α 」や「繰り返し+疑問詞」「間投詞+繰り返し」である。確認型は、「相手の発話をくり返さないが、相手に確認を求めるもの」である。

また、指導場面を一貫し、「かとう?」のように苗字全てを繰り返す聞き返し（単純エコー型）や、「か?」のように苗字の一部を繰り返す聞き返し（不完全エコー型）が見られた。同様に、「もう一回言ってください」というステップ2で学習した聞き返しは、その後の指導場面においてよく使われていた。

表1 指導前のぬり絵ゲームでの聞き返し

対象児の聞き返し	機能分類	表現形式	表現形式の 下位分類
さかのさん？	聞き取り確認要求	エコー型	単純エコー
かたのさん？	聞き取り確認要求	エコー型	単純エコー
か？	聞き取り確認要求	エコー型	不完全エコー
は？	聞き取り確認要求	エコー型	不完全エコー
ズボンも？	聞き取り確認要求	エコー型	単純エコー
手も？(2回)	理解確認要求	非エコー型	確認型
お鼻？	聞き取り確認要求	エコー型	単純エコー

表2 指導後のぬり絵ゲームでの聞き返し

対象児の聞き返し	機能分類	表現形式	表現形式の 下位分類
かたのゆうきさんですか？	聞き取り確認要求	エコー型	複合エコー
かたのさんですか？(2回)	聞き取り確認要求	エコー型	複合エコー
はたのさんですか？	聞き取り確認要求	エコー型	複合エコー
はたのさん？	聞き取り確認要求	エコー型	単純エコー
かたのさん？	聞き取り確認要求	エコー型	単純エコー
か？(2回)	聞き取り確認要求	エコー型	不完全エコー

VI 考察

単純エコー型の聞き返しや、不完全エコー型の聞き返しは対象児がその音の聞き取りに曖昧さを感じているために使用していたと考えられる。しかしながら、それと同様の状況を想定したストーリーでは別の聞き返し方を行っていた。すなわち、不完全エコー型（聞き取りが不明瞭な音を繰り返す聞き返し）は頻繁に使用するものの、意図的・意識的に行ったものではなかったのだと推察された。また、「もう一回言ってください」という繰り返し要求は、対象児にとって使いやすい方略になったと考えられる。

事後評価場面のゲームでは、「かたのゆうきさん？」という「苗字+名前」の複合エコー型の聞き返しが自発的に用いられていた。この聞き返しは、STEP 4と5で取り上げて学習したものであり、ゲーム場面で見られたということは、日常生活場面でも応用できる可能性があると考えられる。さらに、「かたのさんですか？」という「苗字+ですか？」という複合エコー型の聞き返しも見られた。この聞き返し方は意識的に指導したのではなく、指導者が指導場面内で頻繁に使用した言い回しであった。「かたのさん？」より「かたのさんですか？」の方が意識的に聞き返しを行なっているという印象を受ける。

VII 研究のまとめと今後の課題

本研究では、聞き取りが困難な場面での聞き返し方をステップに分けて指導した。指導後の評価場面では、本研究で指導した複合エコー型の聞き返し方を使用しており、繰り返し学習したことで、聞き返しの方略が指導前よりも増加した。方略の使用と定着に関しては、今後は日常生活場面で細かく対象児の様子を観察し総合的に評価していく必要がある。また、対象児が自分の聞き取りの曖昧さをどこまで認識しているのかについては不明なままであった。自身の聞き取りに関しての自覚を促す指導も、今後は行っていく必要があると考えられる。

文献

- 福富奈美(2012) 接触場面の日本語会話における「聞き返し」：どのような「聞き返し」が効果的なストラテジーと言えるか. 四天王寺大学紀要 (53), 275-290.
- 平島ユイ子(2009) 中等度難聴児の聴覚学習～確実な聴取のための聞き返しの学習～. 教育オーディオロジー研究, 3, 27-29.
- 井上理絵・大沼幸恵・原由紀・鈴木恵子・佐野肇・岡本牧人(2005) 軽度・中等度難聴児の実態と補聴器装用—新生児聴覚スクリーニング施行前出生児. *Audiology Japan*, 48(5), 593-594.
- 杉内智子・佐藤紀代子・浅野公子・杉尾雄一郎・寺島啓子・洲崎春海(2001) 軽度・中等度難聴児 30症例の言語発達とその問題. 日本耳鼻咽喉科学會會報 104(12), 1126-1134.